

2019年3月2日

# 男子体操競技情報 27号

(公財)日本体操協会  
東京オリンピック強化本部  
審判委員会体操競技男子審判本部

## 【目次】

1	はじめに	1
2	第48回世界体操競技選手権ドーハ大会報告	2
3	2018年度国内競技大会総括および指標	14
4	2017～2018年Dスコアランキング	17
5	2017年版採点規則修正、追加情報	21
6	おわりに	27
※	難度認定及び演技実施の確認事項とFIG通達	別刷 1
	タイ・ブレイク	別刷 24
	2019年度国内内規	別刷 25

## 1. はじめに

東京オリンピック男子体操競技強化本部  
男子体操競技強化本部長 水鳥 寿思

日本の体操に関わっておられる審判、コーチ、スタッフのみなさまにおかれましては日頃より審判業務、選手強化活動にご尽力いただき誠にありがとうございます。そして、競技力向上を目指した日本選手のたゆまぬ努力に対してこの場を借りて敬意を表します。

昨年開催されました第48回世界選手権大会では団体総合3位となり、東京2020における団体出場権をどの競技よりも早く獲得することができました。しかしながら、ライバルである中国、ロシアには後塵を拝する結果となり、東京2020まで残り1年半と期日が迫るなか、早急に強化策の立て直しを講じる必要があります。特に、Eスコアに対する評価は年々厳しくなっており、難しい技を実施しても正確に美しく表現できなければ高得点には結びつかないように感じます。そのような状況において、ルールを詳細に理解し、それに対応した練習メニューを策定するとともに、着実に遂行していくことが東京2020での成功につながる唯一の方法であると言っても過言ではありません。ナショナル強化では、基本トレーニングを重視した練習内容の実施、中国との合同練習の開催など、東京2020に向けて新たな取り組みを行っています。

個人枠の戦いではメダル獲得の可能性を因るため世界ランキング制を採用するなど、より一層採点の正確性、妥当性が求められています。採点業務を担当される審判の方々におかれましては、ジャッジズスキルが選手強化と選手選考に大きく影響することを改めてご理解いただき、本資料を熟読し研鑽を積んでいただくことで選手の努力に対する貢献と体操界の発展のためにご尽力賜りますようお願い申し上げます。

## 2. 第48回世界体操競技選手権ドーハ大会報告

体操競技男子審判本部  
 本部長 高橋 孝徳  
 本部員 三富 洋昭

1. 派遣期間：2018年10月18日(木)～11月4日(月)
2. 開催地：カタール ドーハ
3. 会場：Aspire Dome [www.aspire.qa](http://www.aspire.qa)
4. 宿泊先：Mövenpick Hotel West Bay Doha
5. 審判員：高橋 孝徳 (体操競技男子審判本部本部長)  
 三富 洋昭 (体操競技男子審判本部本部員)
6. 日程：大会スケジュール

10月	19日	(金)	00:01 出国 → ドーハ着 06:00 男子 FIG 技術委員・D 審判会議
	20日	(土)	男子審判会議・抽選 (C I、C II)
	21日	(日)	男子ポディウムトレーニング (1～5班)
	22日	(月)	男子ポディウムトレーニング (6～10班)
	23日	(火)	女子ポディウムトレーニング (1～6班)
	24日	(水)	女子ポディウムトレーニング (7～11班)
	25日	(木)	開会式 男子予選 (1班～5班)
	26日	(金)	男子予選 (6班～10班) ※日本6班
	27日	(土)	女子予選 (1班～6班) ※日本女子2班
	28日	(日)	女子予選 (7班～11班)
	29日	(月)	男子団体決勝
	30日	(火)	女子団体決勝
	31日	(水)	男子個人総合決勝
11月	1日	(木)	女子個人総合決勝
	2日	(金)	種目別決勝 男子 FX、PH、SR 女子 VT、UB
	3日	(土)	種目別決勝 男子 VT、PB、HB 女子 BB、FX フェアウェルバンケット
	4日	(日)	出国 ドーハ 6:45(QR812)⇒羽田 22:30

7. 参加状況：67カ国 256名
  - 1) チーム数 46ヶ国
  - 2) 個人出場 21カ国

6種目出場：115名

ゆ か：200名

跳 馬：37名 (2本実施)

あん馬：202名

平行棒：189名

つり輪：194名

鉄 棒：197名

## 8. 審判会議

### 1) TC メンバー

TC メンバーにより担当種目のプレゼンテーションが行われた。

TC メンバーと担当種目は以下の通りである。その他、10.審判団を参照。

President MICKEVICS Arturs (LAT)			
FX	THOMSON Jeffrey (CAN)	VT	TOMITA Hiroyuki (JPN)
PH	HUANG Liping (CHN)	PB	MARCOS FELIPE Julio (ESP)
SR	TOMBS Andrew (GBR)	HB	ALBRECHT Holger (GER)

### 2) 審判会議内容

最初に President の MICKEVICS Arturs 氏より挨拶があり、NewsLetter#34 について解説がなされた。次いで種目ごとに担当者からプレゼンテーションが行われた。各種目とも従来からの変更点、および数か所の減点項目の確認や注意点が挙げられ、E スコアの採点練習が実施された。

以下は各種目で取り上げられた減点項目である。

## □ ゆ か

### 1) 静止技の静止時間

- ・十字倒立の肩の高さ、静止時間

### 2) 宙返り技のひねりについて

- ・ひねり不足の減点は実施された角度不足を明確に
- ・連続技の一つ目の着地姿勢についても減点の対象となる

### 3) 着地の準備について

- ・準備局面の見られる着地かどうか、余裕のない捌きは実施の状況により0.1 or 0.3の減点

### 4) コントロールされていない着地

- ・止めることなく、次の動作に移行する捌きは減点の対象
- ・良い捌きとして2015年世界選手権グラスゴー大会の萱選手の映像
- ・着地の足の開きは0.1 or 0.3の減点

### 5) 空中での姿勢

- ・2回宙返りでの脚の開きは開き度合いによって0.1 or 0.3の減点
- ・前方2回宙返りの減点（つま先の乱れ、脚の開き、着地）
- ・連続技の宙返りの高さ
- ・かかえ込みと伸身姿勢の違いを明確に

### 6) 着地でのジャンプ正面支持臥

- ・すぐに倒れ込む捌きは0.5の減点

## □ あん馬

### 1) 交差系の技

- ・脚の高さ（特に交差倒立の前・後での片足の抜き、入れて低い捌きは0.1 or 0.3の減点）

### 2) 交差倒立系の技

- ・スイングを使うことなく力で垂直に脚が上がる捌きは不認定

### 3) 姿勢

- ・腰まがりが見られる度に0.1の減点
- ・旋回における身体の伸ばし、向き



②姿勢

③倒立位からの角度逸脱

- ・棒下宙返り倒立を例に説明

④手のずらし、握り替え、ステップ

⑤コントロールされているかどうか

⑥ダブルスイング (ex)ヒールからスイング倒立、止まらず振り下ろしは 0.3 の減点

2) 宙返り技の捌き

- ・身体の伸ばし、正確な姿勢、コントロールがされているか

3) バブサーでのバーを持つ際の体勢

- ・身体の位置が水平位から外れていたり着手時に肩角度がある実施は減点、46° 以上の逸脱は不認定

4) シャルロタイプ

- ・単棒倒立での静止を明確に見せること
- ・両手の握り位置が離れないこと

5) モイや車輪倒立系での膝のまがり

- ・水平より上からの膝まがりの場合は 0.1、倒立位からの場合は 0.3 の減点

6) 前方宙返り開脚抜き（腕）支持で脚がバーの外を通っていない場合は B 難度となり無価値な開脚として 0.3 の減点

7) 前振り上がり：腰の位置が低い捌きは相応の減点

- ・前振り上がり脚前挙支持は 0.1 or 0.3 の減点

8) 静止技の静止時間

- ・脚前挙支持や力倒立などの静止技は 2 秒静止しなければ 0.3 の減点

9) 終末技

- ・高さ、着地準備、着地

□ 鉄 棒

1) 倒立位からの外れの減点（ルール通り）

2) ひねりを伴う技での倒立位からの外れの減点（ルール通り）

3) 腕のまがり

- ・手放し技の前後やその後の車輪での腕まがりも相応の減点

4) 膝のまがり

- ・手放し技や終末技の前の車輪での膝まがりは 0.1 or 0.3 の減点

5) クースト

- ・ひねり不足、高さ、角度逸脱

※内村選手の映像は減点なしで紹介

6) 終末技

「後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り」での姿勢

腰まがりが、手を放した瞬間、経過中、着地前または全経過でまがっている実施への減点

9. 新技申請

本大会では新技申請は提出されなかった。

10. 審判団

◆ 参加審判

67 カ国 105 名

D 審判：12 カ国 12 名 R 審判：12 カ国 12 名 E 審判：43 カ国 85 名

1 カ国複数名派遣国：38 カ国

◆ D 審判団

FX	D1 : TOTH Josef (AUT)	D2 : HANLEY Nicola (GBR)
PH	D1 : CARRILES Pablo (ESP)	D2 : GIORGADZE Ilia (GEO)
SR	D1 : SEBASTIAO Pedro (POR)	D2 : ANDREEV Dmitrii (RUS)
VT	D1 : ALIYEV Rza (AZE)	D2 : BACHMAN Daniel (USA)
PB	D1 : HADJI Mohammed Smail (ALG)	D2 : THINGVOLD Tom (NOR)
HB	D1 : REIMERING Vincent (NED)	D2 : RUPCIK Lubos (SVK)

◆ 抽選結果

○予選 ゆか E5 三富洋昭

○個人総合決勝 跳馬 E4 高橋孝徳

○種目別決勝 あん馬 E1 高橋孝徳

11. 結果；

□ 日本選手予選結果

個人総合	白井 健三	83.864	6位 予選通過
	萱 和磨	82.915	10位 予選通過
ゆか	白井 健三	14.833	2位 予選通過
	萱 和磨	14.333	8位 予選通過
	谷川 航	14.033	26位
	田中 佑典	13.766	43位
あん馬	白井 健三	12.966	20位
	内村 航平	12.966	21位
	萱 和磨	12.425	41位
	谷川 航	11.000	116位
つり輪	谷川 航	14.000	23位
	萱 和磨	13.966	24位
	内村 航平	13.900	28位
	白井 健三	13.733	39位
跳馬	白井 健三	14.566	7位 予選通過
	谷川 航	14.466	11位
平行棒	田中 佑典	14.833	12位
	谷川 航	14.800	13位
	萱 和磨	14.691	18位
	白井 健三	14.466	25位
鉄棒	内村 航平	14.600	1位 予選通過
	田中 佑典	14.133	10位
	萱 和磨	13.300	45位
	白井 健三	13.133	55位

□ 団体総合予選

Rk.	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	RUS	43.533	40.966	43.033	43.765	45.040	42.065	258.402
2	CHN	41.566	40.940	42.232	44.299	46.066	42.733	257.836
3	日本	43.199	38.357	41.866	43.533	44.324	42.033	253.312
4	USA	42.699	38.833	41.466	43.199	43.233	40.932	250.362
5	GBR	42.415	40.599	41.400	43.432	42.891	39.099	249.836
6	BRA	40.765	36.966	42.299	43.333	42.332	41.266	246.961
7	NED	41.500	37.533	40.233	42.332	42.632	41.433	245.663
8	SUI	41.865	39.099	40.133	41.824	41.599	40.666	245.186

□ 団体総合決勝

Rk.	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	CHN	40.798 (7)	41.898 (1)	42.873 (3)	44.432 (2)	46.133 (1)	40.500 (7)	256.634
2	RUS	43.199 (1)	40.465 (5)	43.691 (1)	44.565 (1)	43.266 (2)	41.399 (5)	256.585
3	日本	42.099 (4)	41.733 (2)	42.549 (4)	44.132 (3)	40.632 (7)	42.599 (1)	253.744
4	USA	42.966 (2)	40.632 (3)	41.465 (6)	43.732 (5)	41.699 (4)	41.500 (3)	251.994
5	GBR	42.599 (3)	40.499 (4)	41.766 (5)	43.900 (4)	40.799 (6)	39.065 (8)	248.628
6	SUI	41.299 (6)	37.132 (7)	41.065 (7)	41.399 (8)	42.266 (3)	41.133 (6)	244.294
7	BRA	41.932 (5)	35.899 (8)	42.899 (2)	42.057 (7)	39.674 (8)	41.533 (2)	243.994
8	NED	38.432 (8)	38.066 (6)	38.898 (8)	42.466 (6)	41.299 (5)	41.499 (4)	240.660

□ 個人総合予選

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	XIAO Ruoteng	CHN	14.200	14.633	14.133	14.933	15.000	14.433	87.332
2	NAGORNY Nikita	RUS	14.800	14.000	14.633	14.733	14.966	13.966	87.098
3	MIKULAK Samuel	USA	14.333	14.133	14.200	14.333	15.033	14.566	86.598
4	DALALOYAN Artur	RUS	14.833	11.766	14.100	14.666	15.041	14.166	84.572
5	SUN Wei	CHN	13.200	13.441	13.933	14.700	14.733	14.000	84.007
6	白井 健三	日本	14.833	12.966	13.733	14.733	14.466	13.133	83.864
7	LIN Chaopan	CHN	12.933	12.866	13.833	14.600	15.266	13.966	83.464
8	BELYAVSKIY David	RUS	12.500	14.000	13.533	14.333	15.033	13.933	83.332

□ 個人総合決勝

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	DALALOYAN Artur	RUS	14.800	13.400	14.533	15.133	15.566	14.166	87.598
2	XIAO Ruoteng	CHN	14.133	14.700	14.333	14.866	15.333	14.233	87.598
3	NAGORNYI Nikita	RUS	14.733	13.566	14.500	14.766	14.866	13.900	86.331
4	SUN Wei	CHN	13.633	14.766	13.900	14.533	14.800	14.266	85.898
5	MIKULAK Samuel	USA	14.400	14.300	14.166	14.600	15.441	12.366	85.273
6	萱 和磨	日本	13.800	14.100	14.000	14.366	14.766	13.733	84.765
7	白井 健三	日本	14.900	12.533	13.666	15.166	14.266	14.000	84.531
8	HALL James	GBR	14.100	13.666	14.066	14.366	14.500	13.600	84.298

□ 日本選手種目別決勝戦績

ゆか	白井 健三	14.866	2位	銀メダル
	萱 和磨	14.100	8位	
跳馬	白井 健三	14.675	3位	銅メダル
鉄棒	内村 航平	14.800	2位	銀メダル

## 12. 所 感

2日間のボディウムトレーニングは、予選競技と同じ時間帯のローテーションで行われた。今大会は中国の TaiShan 製の器具が使用されたが、ゆかフロアーのバネが硬く蹴りが合わない、あん馬の表面が固くすべりやすいなどの指摘が各国から相次いだ。しかしながら使用される器具に合わせて大会に臨んできたチームもあり、その準備が大きく結果にも影響したと考える。

日本チームは、器具との調整に時間を要したが、現状において最大限の点数を獲得できる可能性がある演技構成に切り替えて臨み、銅メダルを獲得した。満足できる結果ではないが、東京五輪の出場権を獲得し、最低限の目標はクリアできた。

団体総合決勝は、日本はあん馬からのスタートとなり、一番手の内村選手が良い滑り出しを見せてくれた。次いで萱選手、谷川選手と順調につなぎ、好スタートを切った。2種目目のつり輪、3種目目の跳馬と好調が続いていたが4種目目の平行棒、最終種目のゆかで大過失がありミスに相当する2点を失った。予選では、中国とロシアの点数差は近似しており、日本とは5点差で上位に位置していた。上位入賞のためには日本は一つもミスが許されない状況のなか、中国やロシアは一つ二つのミスは許容される余裕さを感じられた。優勝した中国、第2位のロシアとの点数差は0.049の僅差であった。

個人総合予選では、足のけがの影響でゆかと跳馬を辞退した内村選手に代わり萱選手が全種目に出場し、白井選手（予選6位）と萱選手（予選10位）が決勝に進んだ。決勝において白井選手は、蹴りが合わないゆかでは演技構成を変えて演技に臨んだが、Eスコアが伸びず予定していた得点には及ばなかった。また、あん馬と平行棒でミスが出てしまい7位となった。萱選手は、大きなミスなく6種目をやり終えたが全体的に得点が伸びず6位となり、日本としてメダルを獲得することはできなかった。個人総合としては23年ぶりのメダルなしの結果で終わった。

一方、中国、ロシアは勢いがあり力をつけてきていると強く感じた。昨年のモントリオール大会では上位に名前が挙がっていなかった DALALOYAN Artur 選手（RUS）が1位、2位に XIAO Ruoteng 選手（CHN）、3位に NAGORNYI Nikita 選手（RUS）と上位3位はロシア、中国勢が占めた。また4位に中国、5位にアメリカが入り個人総合ではアメリカ勢も注視する必要性を感じた。

上位 8 名の D スコア (表 1) では、NAGORNYI Nikita 選手 (RUS) が 36.10 と唯一 36 点台の高いスコアをマークしており、昨年より D スコアを上げてきている。上位の得点から推察すると今後は 36 点台の D スコアを構成することが、メダル争いには必要であると予想される。

(表 1) 個人総合決勝進出者上位 8 名 D スコア

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	個人総合
1	NAGORNYI Nikita	RUS	6.40	5.90	6.00	5.60	6.40	5.80	36.10	3
2	XIAO Ruoteng	CHN	6.10	6.10	5.70	5.60	6.20	6.00	35.70	2
3	SHIRAI Kenzo	JPN	6.80	5.40	5.70	5.60	6.20	5.80	35.50	7
4	DALALOYAN Artur	RUS	6.20	5.50	5.90	5.60	6.40	5.70	35.30	1
5	SUN Wei	CHN	5.50	6.30	5.90	5.60	5.70	6.00	35.00	4
6	KAYA Kazuma	JPN	5.70	6.00	6.10	5.20	6.30	5.70	35.00	6
7	HALL James	GBR	5.90	6.10	5.80	5.20	6.00	5.80	34.80	8
8	MIKULAK Samuel	USA	5.70	6.00	5.60	5.20	6.40	5.70	34.60	5

E スコアは減点項目に則り厳密に採点される傾向は変わらず、ルール通りの機械的な採点は昨年と同様であったが、ZOU Jingyuan 選手 (CHN) の平行棒など素晴らしい実施においては 9 点台中盤の高い評価がされていた。

個人総合決勝での上位 8 名の E スコアを高い順に並べると表 2 のようになり、E スコアにおいてもロシア、中国勢が上位を占める結果となっている。

昨年と比較し、D スコア、E スコアともにロシア勢が上位に 2 人ランクインしていることから若手が順調に力をつけてきていることが伺える。

昨年上位に入っていた Belyavskiy David 選手 (RUS) は、予選においてゆかとあん馬で大きなミスをしているため、個人総合には出場していないが、予選での E スコアトータルは 48.734 点と上位に迫っている。

上位 8 名の E スコア (表 2) では、5 名の選手に 7 点台、1 名に 6 点台のスコアがみられた。いずれかの種目において、演技が安定しなかった、または弱点種目のあることが伺える。今後メダル争いや上位に入るためには、D スコアを向上させるとともに、弱点種目を克服し、E スコアを高めることが急務の課題となるであろう。

(表 2) 個人総合決勝進出者上位 8 名 E スコア

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	個人総合
1	DALALOYAN Artur	RUS	8.600	7.900	8.633	9.533	9.166	8.466	52.298	1
2	XIAO Ruoteng	CHN	8.033	8.600	8.633	9.266	9.133	8.233	51.898	2
3	SUN Wei	CHN	8.133	8.466	8.000	9.033	9.100	8.266	50.998	4
4	MIKULAK Samuel	USA	8.700	8.300	8.566	9.400	9.041	6.666	50.673	5
5	NAGORNYI Nikita	RUS	8.333	7.666	8.500	9.166	8.466	8.100	50.231	3
6	KAYA Kazuma	JPN	8.100	8.100	7.900	9.166	8.466	8.033	49.765	6
7	HALL James	GBR	8.200	7.566	8.266	9.166	8.500	7.800	49.498	8
8	SHIRAI Kenzo	JPN	8.100	7.133	7.966	9.566	8.066	8.200	49.031	7

種目別決勝においては、内村選手が鉄棒で銀メダル、白井選手がゆかで銀、跳馬で銅メダルを獲得した。

萱選手がゆかで決勝に進出し 8 位であった。ほかの日本選手も果敢に攻めた演技を披露してくれたが、決勝進出には至らなかった。

ゆかでは、白井選手が器具のバネに対応できず、本来の D スコアを下げた構成で演技に臨んだが、E スコアが伸びず 1 位の DALALOYAN Artur 選手 (RUS) に僅差で 2 位という結果であった。一方、アメリカの MOLDAUER Yul 選手は、丁寧な着地の捌きを行い 8.766 と高い E スコアを獲得していた。ゆかにおいては、ミスのない演技でしっかりと着地を止めたことを示した捌きに高い E スコアが出ていた。

あん馬は、LEE Chih Kai 選手 (TPE) が開脚旋回をメインに組み入れた演技構成をスピード感のある実施で披露し、E スコアの最高となる 8.666 を獲得した。XIAO Ruoteng 選手 (CHN) が WHITLOCK Max 選手 (GBR) と 15.166 点で同点であったが E スコアが高いため 1 位となった。

逆交差倒立 (D) の倒立に持ち込む際の脚の振りが見られない捌きについては、厳しくチェックされ、予選では不認定となるケースも散見された。判断基準のひとつとして、スイングした両脚が馬体よりも振りあがること、下半身が上半身に近づくように脚が戻り、下がる動きがないこと、捌きのほとんどを力の使用による実施とならないことが条件である。

つり輪の決勝出場者は団体総合や個人総合上位国からは少なく、つり輪に特化したスペシャリストが多く進出している。優勝した PETROUNIAS Eleftherios 選手 (GRE) の E スコアは 9.066 であり、力技の捌きはより力強く、洗練された実施であった。上位選手は D スコアが近似しており E スコアに関しても 1 位から 6 位までの選手が 8.6 台から 9.0 台までの 0.4 の僅差の中に位置していた。今後は更に細かい部分での捌き方や表現などが、序列に影響してくると予想される。静止時間や角度など一定の評価ラインの領域に達していない演技実施はさらに厳しい採点になることが考えられる。

跳馬は、1 位の RI Se Gwang 選手 (PRK) が唯一 6.0 の跳越技を 2 本実施した。E スコアは 2 本とも 8.933 と 9 点台には及ばなかったが D スコアの高さにより優勝した。白井選手は、2 本目 5.2 の跳越技であったが、着地を決め E スコアで 9.40 の最高点をマークし、銅メダルを獲得した。他の選手と比較し高い腰の位置での着地は的確に評価されていた。

跳馬においては第 2 局面の雄大さとともに高い腰の位置でしっかりと着地を止めに行くことが重要である。第 1 局面の脚の開きに関しては厳密に減点がなされていた。

平行棒は、ZOU Jingyuan 選手 (CHN) が D スコアを予選 6.6 から 7.0 に引き上げ、更に E スコアでも途中若干バランスをくずしながらも 9.433 をマークし、決定点 16.433 と 2 位以下を大きく引き離し優勝した。手のずらしがなく、雄大さと高い安定感で見守る者を魅了する素晴らしい演技であった。

終末技は、前方 2 回宙返り系の技を実施する選手が増えたが、空中での脚開き、着地でのゆがみや姿勢など、厳しく採点される傾向となってきた。昨年以上に洗練された捌きが要求されていた。

鉄棒は、ZONDERLAND Epke 選手 (NED) が D スコア 6.8、E スコア 8.30 で優勝した。E スコアの最高点は MIKULAK Samuel 選手 (USA) の 8.433 点であり、依然として E スコアが伸びない種目であった。内村選手は素晴らしい実施で着地を決めるも E スコアの 8.40 に会場内も不満のどよめきが広がった。1 位には及ばなかったが銀メダルを獲得した。内村選手の実施をもってしても E スコアが 8.40 という結果を受け止め、実施と減点個所の詳細な分析を進める必要がある。鉄棒全般にひねり系の技での角度の減点に加え、手放し技実施後の処理や姿勢欠点、終末技での空中姿勢や着地など、まだまだ改善されるべき箇所があると感じた。

2017 年版ルールが適用されて 2 年目となり、技の認定、減点の度合いはどの程度の基準なのかを注視して大会に臨んだ。技の認定に関しては条件が付随されたもの以外では、特に大きな変更はない印象であったが、ゆかの前方宙返りの判定、あん馬の逆交差倒立の判定がより厳密になされて

いた。

E スコアについては減点項目が厳密に適用され、正確な実施からの逸脱は技の難易度に関係なく減点されていた。ルールに忠実かつ美しさ、雄大さまたは力強さが表現された実施が評価されていた印象であった。

今大会では中国、ロシアが存在感を示し、ルールに準じた選手強化が順調に進んでいることをアピールする結果となった。特にロシアは昨年からさらに力をつけ進化したと感じる。団体決勝では、1位中国と2位ロシアとの点数差は0.1未満の僅かな差で金メダルを争った。日本はその後を2.841点と大きな差をあけられ後塵を拝する結果となった。適切な強化策を講じなければ中国、ロシアとの差は縮まらず、2020年東京五輪での金メダル争いからも脱落しかねない危機感を感じた。今回の結果を真摯に受けとめ、大きな課題を得たととらえるならば、今後の強化策、戦略を講じるうえでは貴重な経験であったと考えられる。東京五輪に向けた世界へのアピールのためには2019年世界選手権シュツットガルト大会での躍進が重要である。今回得た課題を一つ一つクリアできるよう強化策を練り直し、新たな戦術を講じてこれからの大会での活躍を強く願いたい。

◇ メダル獲得数

◇国別メダル獲得数

		1位	2位	3位	合計
1	RUS	2	2	2	6
2	CHN	3	1		4
3	JPN		2	2	4
4	GRE	1			1
5	PRK	1			1
6	NED	1			1
7	GBR		1		1
8	BRA		1		1
9	UKR		1		1
10	PHI			1	1
11	TPE			1	1
12	ITA			1	1
13	USA			1	1

◇種目別メダル獲得国

	1位	2位	3位
団体総合	CHN	RUS	日本
個人総合	RUS	CHN	RUS
ゆか	RUS	日本	PHI
あん馬	CHN	GBR	TPE
つり輪	GRE	BRA	ITA
跳馬	PRK	RUS	日本
平行棒	CHN	UKR	RUS
鉄棒	NED	日本	USA

13. 種目別上位者の演技構成

◆ ゆか

1. DALALOYAN Artur (RUS) 14.900 D6.20 E8.700

前方伸身宙返り 1回ひねり～前方伸身宙返り 5/2ひねり(C+E)、前方伸身宙返り～前方屈身 2回宙返り(B+E)、後方かかえ込み 2回宙返り 2回ひねり (E)、後方伸身宙返り 5/2ひねり～前方伸身宙返り 2回ひねり(D+D)、後方伸身宙返り 3/2ひねり～前方伸身宙返り 3/2ひねり(C、C)、開脚座から伸腕屈身力十字倒立(C)、後方伸身宙返り 3回ひねり(D)

2. 白井 健三 (JPN) 14.866 D6.80 E8.066

後方かかえ込み 2回宙返り 3回ひねり (G)、前方かかえ込み宙返り 1回ひねり～前方伸身宙返り 3回ひねり(B+F)、後方伸身宙返り 5/2ひねり～前方伸身宙返り 5/2ひねり(D+E)、後方伸身宙返り 4回ひねり(F)、倒立から伸膝前転脚前挙支持経過開脚倒立 (C)、後方伸身宙返り 7/2ひねり～前方伸身宙返り 1回ひねり(E+C)、後方伸身宙返り 3回ひねり(D)

3. YULO Carlos Edriel (PHI) 14.600 D6.20 E8.400

前方屈身2回宙返りひねり(F)、後方伸身宙返り5/2ひねり～前方伸身宙返り5/2ひねり(D+E)、後方伸身宙返り7/2ひねり～前方伸身宙返りひねり(E+B)、後方伸身宙返り2回ひねり(C)、開脚座から伸腕屈身力十字倒立(C)、前方伸身宙返り1回ひねり～前方伸身宙返り2回ひねり(C+D)、後方伸身宙返り3回ひねり(D)

◆ あん馬

1. XIAO Ruoteng (CHN) 15.166 D6.60 E8.566

馬端縦向き旋回1回ひねり(D)、トンフェイ(D)、開脚旋回3/3前移動(E)、開脚旋回3/3後ろ移動(E)、Eフロップ(E)、ブスナリ(F)、逆交差倒立(D)、Dコンバイン(D)、ロシアン1080°転向(D)、ループ倒立450°ひねり3/3部分移動下り(E)

2. WHITLOCK Max (GBR) 15.166 D6.800 E8.366

逆交差倒立(D)、Eコンバイン(E)、Eフロップ(E)、ブスナリ(F)、馬端縦向き旋回1回ひねり(D)、開脚旋回3/3前移動(E)、開脚旋回縦向き3/3後ろ移動1回ひねり(E)、ウ・グォニアン(E)、ロシアン1080°転向(D)、ループ倒立450°ひねり3/3部分移動下り(E)

3. LEE Chih Kai (TPE) 14.966 D6.30 E8.666

逆交差倒立(D)、下向き逆移動倒立3/3部分移動、下ろして開脚旋回(E)、両手を挟んで旋回1回ひねり(F)、両手を挟んで横向き旋回(B)、横向き旋回1回ひねり移動(E)、横向き旋回1回ひねり(D)、1回の旋回で正面横移動(C)、開脚旋回3/3前移動(E)、開脚旋回3/3後ろ移動(E)、下向き逆移動倒立3/3部分移動下り(D)

◆ つり輪

1. PETROUNIAS Eleftherios (GRE) 15.366 D6.30 E9.066

ヤン・ミンヨン(E)、ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、後方車輪倒立(C)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ナカヤマ(D)、輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂(D)、ジョナサン(D)、前方車輪倒立(C)、後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり下り(E)

2. ZANETTI Arthur (BRA) 15.100 D6.20 E8.900

ヤン・ミンヨン(E)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、ジョナサン(D)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ナカヤマ(D)、輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂(D)、ほん転逆上がり倒立(C)、前方車輪倒立(C)、後方伸身2回宙返り1回ひねり下り(D)

3. LODADIO Marco (ITA) 14.900 D6.30 E8.600

バランディン3(E)、ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ヤマワキ(C)、ジョナサン(D)、輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂(D)、後ろ振り上がり水平支持(D)、アザリアン(D)、後ろ振り上がり倒立(C)、後方かかえ込み2回宙返り2回ひねり下り(E)

◆ 跳 馬

1. RI Se Gwang (PRK) 14.933

1 本目：リ・セグウアン 2	14.933	D6.00	E8.933
2 本目：リ・セグウアン	14.933	D6.00	E8.933

2. DALALOYAN Artur (RUS) 14.883

1 本目：シライ／キム・ヒフン	14.866	D5.60	E9.266
2 本目：ブラニク	14.900	D5.60	E9.300

3. 白井 健三(JPN) 14.675

1 本目：シライ／キム・ヒフン	14.750	D5.60	E9.150
2 本目：ドリッグス	14.600	D5.20	E9.400

◆ 平行棒

1. ZOU Jingyuan (CHN) 16.433 D7.00 E9.433

ソラキディス(G)、マクーツ(E)、リチャード (E)、棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、前方宙返り開脚抜き直接懸垂(E)、バブサー (E)、ティップルト(D)、ヒーリー(D)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

2. VERNIAIEV Oleg (UKR) 15.591 D6.70 E8.891

後振り上がり前方宙返り支持(D)、棒下宙返りひねり倒立(E)、シャルロ(E)、単棒倒立からヒーリー(E)、マクーツ(E)、ティップルト(D)、バブサー (E)、ヒーリー(D)、ピーターズ(D)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

3. DALALOYAN Artur (RUS) 15.366 D6.40 E8.966

横向き逆上がり倒立 1/4 ひねり倒立(D)、リチャード (E)、前振り上がりひねり倒立(E)、ティップルト(D)、バブサー(E)、前方宙返り開脚抜き腕支持(D)、ヒーリー(D)、後振り上がり前方宙返り支持(D)、前振りひねり倒立(C)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

◆ 鉄 棒

1. ZONDERLAND Epke (NED) 15.100 D6.80 E8.300

エンドー1 回ひねり大逆手(D)、カッシーナ～コバチ(G+D)、コールマン～ゲイロード 2(E+E)、アドラー1 回ひねり逆手倒立(E)、アドラーひねり倒立(D)、シュタルダー(B)、クースト(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

2. 内村 航平 (JPN) 14.800 D6.40 E8.400

屈身コバチ(E)、カッシーナ(G)、コールマン(E)、シュタルダー3/2 ひねり片大逆手(D)、アドラー1 回ひねり逆手倒立(E)、ヤマワキ(D)、エンドー(B)、アドラーひねり倒立(D)、クースト(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

3. MIKULAK Samuel (USA) 14.533 D6.1 E8.433

カッシーナ(G)、コールマン(E)、伸身トカチェフ(D)、トカチェフ～リンチ(C+D)、ツォ・リミン(C)、アドラーひねり倒立(D)、クースト(C)、シュタルダー(B)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

### 3. 2018年国内競技会総括および指標

#### 1) 全日本個人総合・種目別・団体選手権、NHK杯、他一般規則適用競技会

##### □ ゆか

ゆかのDスコアでは、6.0が分厚い壁となっており、上位選手の演技はほとんどが5点台中盤から6点の範囲に集中していた。Eスコアでは、着地が多い種目のため、高得点の出づらい種目の一つになっており、得点分布は8点を少し上回るレンジに集中する傾向であった。着地の「一步」の解釈がより厳しく評価されることになった上に、ひねり不足や姿勢の乱れ等、他の減点項目も厳密に採点された結果であろう。高得点を得るためには、高い実施レベルでの精度が要求される状況である。個々の技としては「開脚旋回 270° 以上ひねり直接倒立、下ろして旋回」の認定に関して問題提起がなされた。開脚旋回を回してから技に入ろうとする際、旋回の抜き部分で既にひねりの動作が見られると、「旋回2周以内」の条件に抵触し、分割或不認定となる恐れも生じるので注意して欲しい。

今後の方針については、まずは引き続き着地が止まる演技を評価するが、特に止まった場合は確実に踵を閉じて減点を帳消しにする捌きを求めたい。また跳馬と同様に上半身が起き上がった腰高で安定した着地も期待する。宙返り系の技では、ひねり不足による斜め向きの着地から次の宙返りへつなぐ実施は、減点項目として注意喚起されている状況である。また、姿勢によって難度の異なる技は、意図を明確にして実施する必要がある。腰や膝のまがりによって意図が不明瞭な実施では、不本意な判定となる恐れがある上、曖昧な姿勢として減点の対象である。Dスコアの上がる可能性を模索しつつ、精度を高めた実施となるよう、今後のトレーニングを計画して欲しい。

##### □ あん馬

得点の分布を見るとDスコア6.0以上を揃えることが難しく、Eスコアも8点半ばで頭打ちになってしまった。

ドーハの世界選手権では交差倒立の判定基準が明確化されたため、腰のまげ過ぎや力を使った実施についてはより厳しく採点されることになった。不認定とされないためにも振動を使った正しい捌きを期待する。

フロップおよびコンバインでは各自の旋回から姿勢がずれたり、足先が上下したりすると1周毎に減点されてしまうため、できるだけ体が伸びて安定した実施が求められる。

ウ・グォニアン、ロス、トンフェイ等の移動技では転向中の姿勢はもちろんのこと、終末局面の旋回に入る場面でリズムを崩さないことに注意が必要となってくる。

マジヤールおよびシバドの角度逸脱に関しては機械的に減点されてしまうので、縦向き旋回を習得する段階から向きを意識する必要がある。また開脚での実施もかなり多くなってきているが、閉脚同様に角度はチェックされるので、特に後ろ移動の体の向きについては減点されないように対処していく必要がある。

##### □ つり輪

上位選手においてはDスコア5.7~6.1の範囲に大多数の選手が分布し、Eスコアの獲得に関心が高かったと思われる。高難度の力技に挑戦すべきシーズンであったのではないかと思われたが、実施減点が厳しいとなれば、新たな技への挑戦は難しい状況になってしまったと考えられる。また、輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂や、振り上がり開脚水平支持、十字倒立に関しては、減点をされない実施が難しいようで、構成に入れない演技が多くなったように見受けられる。減点されないように技を減らすのではなく、高難度技を減点なく捌けるようなトレーニングへの取り組みと挑戦を期待したい。

Eスコアに関しては、静止時間や技のつなぎ部分の肘まがりの改善、着地を止める取り組みに関しては一定の成果が見られたように思う。今後もさらに力強い捌き、姿勢まで意識して「止めた」印象の着地に期待したい。力（静止）技に関しては、中水平支持の肩の高さや体の「反り」、ナカヤ

マヤアザリアンへの持ち込みの際の早すぎる動作、および反動のような捌きが気になるケースが多かった。また、逆懸垂での静止時間対策として、「体を伸ばした逆懸垂で1秒強～ゆっくり下ろして～体をたたんだ逆懸垂で1秒強」のような実施が散見された。無価値な動きの連続と判断される可能性が高い。

現状から D および E スコアアップのためには、正しい技術や正しい姿勢への妥協のない継続的なトレーニングを、日本全体として取り組んでいく必要があると思われる。それだけのことができる時間がまだ残されている。

#### □ 跳馬

今年度は「雄大な跳越の実施」と、「腰高で安定した着地」を評価するといった指針をもとに採点をおこなった。年間を通して、ロペスやヨー2などといった D スコア 5.6 の実施が例年に比べて増えてきており、安定した実施も多くみられるようになった。また、リ・セグアンやブラニク、ロペスひねりなどといった希少価値の高い跳越技の実施が見られるなど、技のレパトリーが全体を通して増えてきたように感じた。実施面においては高さ不足や姿勢欠点、着地の準備不足などといった減点がまだ多く見られた。また、カサマツ系の跳越技において、第一局面で側方倒立姿勢を見せず、手を前後にずらしただけの跳越を前方系と判定し、種目別競技会において「一本目と同一グループの跳越技の実施」として ND2.0 の減点が伴ったケースがあった。

#### □ 平行棒

倒立位での手ずらしを行う演技は以前より減少したことは評価できる。棒下宙返り倒立においては、肘の緩みやまがり、倒立位からの若干の角度逸脱、倒立の姿勢不良など改善が望まれる。特に倒立を終末局面とする技は、倒立の姿勢において、肩角度のあるもの、身体の反りなどの姿勢不良が見られる倒立も多く、今後は一直線になったまっすぐの倒立を意識した改善が望まれる。正しい姿勢で安定した美しい倒立を基盤とした洗練された実施を心掛けていただきたい。また、多くの選手がティップルトを実施しているが、切り返し直後の開脚の支持局面で、一瞬足先が僅かに下がる実施が散見された。終末技に関しては D スコアを高めるため、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り (F) を実施する選手が増えてきたことは評価できるが、脚を閉じて実施する選手は少なく、殆どの実施において脚が肩幅程度に開く演技が目立ち、それに加えてつま先が伸びていない実施も見られた。同じ技を海外のトップ選手は脚を閉じ、着地の準備局面も見せる実施を行っている。彼らと勝負するためには、早急に解決すべき課題であろう。

#### □ 鉄棒

本年度においても E スコアが伸び悩む傾向は変わらず、振動倒立（経過）技においては、水平位までは難度は認定されるものの、角度減点は中欠点または大欠点を伴う実施が多く見られた。ひねって（片）大逆手になる技を多用することによって、角度減点がかさむこととなり、E スコアが伸びない傾向であった。しかし、それを回避するために手放し技を多用する演技も多くなってきたように感じた。手放し技については組合せ加点を得るより高難度の手放し技を単独で多用する方が落下のリスクが少ないためか、連続して行う選手は少数であった。ブレットシュナイダー (H) やミヤチ (I) などの高難度の手放し技を全国高校総体、国体等で高校生も挑戦する選手が出てきたことは喜ばしいことである。

後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂 (C) ～順手背面車輪 (D) ～順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立 (C) を演技構成に取り入れる選手が増えた。しかし実施においては技能と柔軟性で捌きの格差がみられ、今後その捌きの差異を明確に判定していく必要がある。

終末技の前にクーストを実施する選手が多くいるが、難度を満たすだけのために取り入れているようにも感じる。演技を構成する技の一つとして角度減点がなく、かつ全体のリズムを失うことなく実施することが望まれる。

手放し技や終末技の前の車輪の抜きでは膝まがりが目立ち、美しさに欠ける演技も散見された。技術、姿勢の両面から再確認して欲しい。

終末技は後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D)、または 2 回ひねり下り (E) が大半で、特に後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下りでは経過中に腰まがりが目立つ実施が多かった。

最後にワイヤーにかける張力計を使用する選手・所属が昨年度から増え、競技前アップ時間をオーバーしてしまうことがたびたびあった。コーチは所属を超えて協力し合い素早く行おうとする努力は見られたが、対策の必要性を感じた。

## 2) ジュニアルール (U-12、U-15) 適用大会総括および指標

平成最後となる第 49 回全国中学校体操競技選手権大会 (島根) は 2017 年制定・2018 年中学校男子適用規則 (U-15) を採用した最初の大会となった。これは中体連が長年に渡り採用してきた規定演技を廃止し、また自由演技を 10 点満点の採点から一般ルールの D・E 制に変更するなど新たな試みへの第一歩を踏み出した大会ともなった。

新しい規則を適用する趣旨は小学生 (U-12) から中学生 (U-15)、高校生 (ジュニア 2 部、高校適用) そして一般規則に至るまで一貫性のある、段階的な指導ならびに評価ができることを意図している。また「みる」「しる」という観点からは、東京 2020 に向けて初心者からオリンピック選手まで同一の採点様式で評価が行われ、体操競技の理解と普及を目指すことができる。

競技会においては、a 難度 (スモール a) を取り入れることで初心者が中体連の大会に出場しやすくなったという声が聞かれ、「普及」という観点からは都道府県単位の大会では良い傾向が伺えた。しかしながら上位者においては全種目に共通して高難度技に傾斜した (D スコア重視) 演技が多い傾向がみられ、実施 (E スコア) に関しては「拙劣な」演技が多かった。規定演技を実施しないことで、指導者や選手の「技の美しさ」や「基本技の習熟」に対する意識が薄れ、「D スコア重視」という意識が先行するようになったら、将来の日本に「美しい体操」は存在しなくなる。そのような危機感を感じる大会でもあった。また、郡や市などの地区大会や都道府県、ブロック大会における実施の評価基準 (E スコア) は、昨年度までの傾向が強く残っており、D と E に分割した意図が十分反映されない傾向も見られた。E スコアの評価基準を前規則の尺度から新しいものへと切り替えることをお願いしたい。「減点がないだけでなく、極限を求めた捌きを評価していく」採点指針であることを理解していただきたい。

U-12 においても、10 点満点の採点から D・E 採点へと踏み出したが、U-15 に比較して、より E スコアの問題点が浮き彫りになったように感じられた。成長過程のクラスであることは明らかであるが、未完成のままの技を羅列した演技が多く、全国大会であるにも関わらず一つ一つの動きに対する美しさへの意識が低い印象を受けた。体や脚のライン、倒立の美しさや完成度は、その後の競技者レベルや表現の芸術性に関わる重要な基本技能であり、習得後の修正が難しい部分でもあるので、強いこだわりを持って作り上げていってほしい。

ジュニア期において美しさに対する意識を高く持ち、それを表現できる技能を獲得していかなければ、2024 年、およびそれ以降と続くオリンピックでは中国やアメリカ、ロシアの後塵を拝することになりかねない。選手やコーチの方々には今一度、美しさを表現する原点に戻り「どの角度から誰が見ても美しい体操」を目指してトレーニングを継続していただきたい。審判の方々も正確で妥当な評価が下せるように情報収集と審判技能の向上を図っていただきたい。「理想像」と対決した規定演技の評価を念頭においた採点が求められる。

#### 4. 2017年～2018年Dスコアランキング

2017年から2018年までの国際大会、国内大会の個人総合やNHK杯を対象に各種目のDスコアランキングを掲載する。

対象大会は世界選手権、ワールドカップシリーズ、チャレンジカップシリーズ、その他主要な国際大会、強豪国国内の主要競技会、日本国内での主要競技会である。該当選手の最も高いDスコアが複数の大会で同スコアとなっている場合は、一競技会のみ取り上げた。

世界の状況を把握し、現場での目標の指標のひとつとして参考にして頂きたい。

◇ 発表された競技会と省略記載

競技会	記載	競技会	記載
世界選手権（予選）	WGC 予	全日本個人（トライアル含）	AJ 個
世界選手権（種目別）	WGC 種	NHK 杯	N 杯
世界選手権（個人総合決勝）	WGC 個	全日本種目別	AJ 種
ワールドカップ・メルボルン大会	Melbourne	ワールドカップ・ドーハ大会	Doha
ワールドカップ・バクー大会	Baku	ワールドカップ・コトブス大会	Cottbus
ワールドカップ・シュツットガルト	Stuttgart	ワールドカップ・バーミンガム	Birm
ワールドカップ・東京	Tokyo	全日本インカレ	インカレ
チャレンジカップ・Varna	Varna	全日本シニア	シニア
チャレンジカップ・Paris	Paris	全日本団体	AJ 団
チャレンジカップ Ljubljana	LJU	アジア選手権大会	A・C
チャレンジカップ Szombathely	SBH	中国運動会（国内大会）	NC 中国
2017 ヨーロッパ選手権	E・C	全国中国選手権（国内大会）	AC 中国
ユニバーシアード大会・台湾	UNIV	豊田国際	TOYOTA
個人総合スーパーファイナル	SPF	英国大会（国内大会）	NC 英国

※世界ランキングで日本人が国際大会で発表の場合は日本、国内大会の場合、所属先で表記

#### 【個人総合】世界ランキング

Rk.	選手	所属	FX	PH	SR	VT	PB	HB	AA	競技会
1	VERNIAIEV O	UKR	6.2	6.4	6.1	5.6	6.7	5.7	36.7	WGC 個 17
2	LARDUET M	CUB	6.0	5.8	6.1	5.6	6.4	6.3	36.2	WGC 予 17
3	NAGORNY N	RUS	6.4	5.9	6.0	5.6	6.4	5.8	36.1	WGC 個 18
4	白井 健三	日本体育大学	7.1	5.4	5.7	5.6	6.1	6.1	36.0	SPF18
5	LIN Chaopan	CHN	6.2	5.8	5.6	5.6	6.4	6.2	35.8	WGC 個 17
5	XIAO Ruoteng	CHN	6.1	6.1	5.7	5.6	6.2	6.1	35.8	WGC 予 18
7	萱 和磨	順天堂大学	5.9	6.4	6.1	5.2	6.3	5.7	35.6	N 杯 18
8	BELYAVSKIY D	RUS	5.8	6.4	5.5	5.6	6.4	5.8	35.5	WGC 予 17
9	CALVO M J	COL	5.8	6.3	5.5	5.2	6.5	6.1	35.4	WGC 個 17
9	加藤 凌平	コナミスポーツ	6.2	5.8	5.5	5.6	6.1	6.2	35.4	シニア 17
9	DENG Shudi	CHN	6.2	5.8	5.7	5.2	6.4	6.1	35.4	AC 中国 18
9	谷川 航	日本	6.0	5.8	6.0	5.6	6.2	5.8	35.4	Tokyo18
13	山室 光史	コナミスポーツ	5.7	6.2	6.2	5.6	6.5	5.1	35.3	N 杯 17
13	DALALOYAN A	RUS	6.2	5.5	5.9	5.6	6.4	5.7	35.3	WGC 個 18

## 日本人ランキング

Rk.	選手	所属	FX	PH	SR	VT	PB	HB	AA	競技会
1	白井 健三	日本体育大学	7.1	5.4	5.7	5.6	6.1	6.1	36.0	SPF18
2	萱 和磨	順天堂大学	5.9	6.4	6.1	5.2	6.3	5.7	35.6	N杯18
3	加藤 凌平	コナミスポーツ	6.2	5.8	5.5	5.6	6.1	6.2	35.4	シニア17
3	谷川 航	順天堂大学	6.0	5.8	6.0	5.6	6.2	5.8	35.4	Tokyo18
5	山室 光史	コナミスポーツ	5.7	6.2	6.2	5.6	6.5	5.1	35.3	N杯17
6	千葉 健太	順天堂大学	6.0	6.0	5.5	5.6	6.2	5.9	35.2	Tokyo18
7	野々村 笙吾	セントラル	5.7	5.7	6.2	5.2	6.4	5.9	35.1	N杯17
7	前野 風哉	鹿屋体育大学	5.8	6.1	5.8	5.6	5.7	6.1	35.1	AJ団17
7	内村 航平	リンガーハット	6.0	5.7	5.7	5.2	6.1	6.4	35.1	N杯18

## 【ゆか】

## 世界ランキング

Rk.	選手	国名	Dスコア	競技会
1	白井 健三	日本体育大学	7.2	N杯18
2	REMQUES Christopher	AUS	6.8	Melbourne18
3	NAGORNY Nikita	RUS	6.7	WGC予17
3	五島 誉博	相好体操クラブ	6.7	N杯18
5	LANKIN Dmitrii	RUS	6.6	Cottbus17
5	DOLGOPYAT Artem	ISR	6.6	Cottbus18
7	MARIAN Dragulescu	ROU	6.5	SBH17
7	REMQUES Christopher	AUS	6.5	WGC予17

## 日本人ランキング

Rk.	選手	所属	Dスコア	競技会
1	白井 健三	日本体育大学	7.2	N杯18
2	五島 誉博	相好体操クラブ	6.7	N杯18
3	佐藤 巧	徳洲会	6.4	N杯18
3	南 一輝	仙台大学	6.4	N杯18
3	松見 一希	仙台大学	6.4	AJ団18

## 【あん馬】

## 世界ランキング

Rk.	選手	国名	Dスコア	競技会
1	WHITLOCK Max	GBR	7.0	WGC団18
2	VERNIAIEV Oleg	UKR	6.7	UNIV17
2	杉野 正堯	鹿屋体育大学	6.7	AJ団18
4	萱 和磨	順天堂大学	6.6	AJ種18
4	長谷川智将	日本	6.6	豊田国際18
4	XIAO Ruoteng	CHN	6.6	WGC種18

## 日本人ランキング

Rk.	選手	所属	Dスコア	競技会
1	杉野 正堯	鹿屋体育大学	6.7	AJ団18
2	萱 和磨	順天堂大学	6.6	AJ種18
2	長谷川智将	徳洲会	6.6	豊田国際18
4	亀山 耕平	徳洲会	6.5	N杯18
4	今林 開人	セントラル	6.5	AJ個18
4	前田 航輝	筑波大学	6.5	N杯18
4	永吉 雄	相好体操クラブ	6.5	AJ種18

## 【つり輪】

### 世界ランキング

Rk.	選手	国名	Dスコア	競技会
1	LIU Yang	CHN	6.5	AC 中国 18
2	YAN Mingyong	CHN	6.4	NC 中国 17
2	TULLOCH Courtney	GBR	6.4	NC 英国 17
2	DAVTYAN Vahagn	ARM	6.4	Doha17
2	LEI Peng	CHN	6.4	NC 中国 17
2	PETROUNIAS E	GRE	6.4	AGF18
2	YOU Hao	CHN	6.4	Cottbus18
2	Lan xingyu	CHN	6.4	AC 中国 18
2	TULLOCH Courtney	GBR	6.4	豊田国際 18

### 日本人ランキング

Rk.	選手	所属	Dスコア	競技会
1	野々村 笙吾	セントラルスポーツ	6.3	AJ 種 17
1	岡村 康宏	朝日生命	6.3	N 杯 17
1	神本 雄也	コナミスポーツ	6.3	N 杯 17
1	足立 大樹	日本体育大学	6.3	N 杯 17
1	長野 託也	朝日生命	6.3	N 杯 18

## 【跳馬】

### 跳越技 6.0 実施選手 (世界)

	選手	国名	Dスコア	競技会	跳越技
1	MEDVEDEV A	ISR	6.0	E・C17	屈身ドラグレスク
1	WHITTENBURG D	USA	6.0	WGC 種 17	リ・セグァン
1	YANG Hakseoun	KOR	6.0	WGC 予 17	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	RADIVILOV I	UKR	6.0	E・C17	屈身ドラグレスク
1	白井 健三	日本体育大学	6.0	AJ 種 17	シライ 2
1	小倉 佳祐	早稲田大学	6.0	AJ 種 17	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	NINREYES Audrs	DOM	6.0	WGC 予 18	リ・セグァン
1	RI Se Gwanng	PRK	6.0	WGC 種 18	リ・セグァン 屈身ドラグレスク
1	安里 圭亮	日本	6.0	Melbourne18	リ・セグァン
1	遠藤 幹斗	静岡産業大学	6.0	AJ 種 18	ヤン・ハクソン
1	大久保圭太郎	順天堂大学	6.0	AJ 種 18	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	長谷川瑞樹	鹿屋体育大学	6.0	AJ 団 18	ヤン・ハクソン
1	米倉 英信	日本	6.0	Cottbus18	伸身カサマツ 5/2 ひねり

### 跳越技 6.0、5.8 実施選手 (日本)

	選手	所属	Dスコア	競技会	跳越技
1	白井 健三	日本体育大学	6.0	AJ 種 17	シライ 2
1	小倉 佳祐	早稲田大学	6.0	AJ 種 17	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	安里 圭亮	相好体操クラブ	6.0	Melbourne18	リ・セグァン
1	遠藤 幹斗	静岡産業大学	6.0	AJ 種 18	ヤン・ハクソン
1	大久保圭太郎	順天堂大学	6.0	AJ 種 18	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	長谷川瑞樹	鹿屋体育大学	6.0	AJ 団 18	ヤン・ハクソン
1	米倉 英信	福岡大学	6.0	Cottbus18	伸身カサマツ 5/2 ひねり
8	内村 航平	リンガーハット	5.8	WGC 予 17	リー・シャオペン

【平行棒】

世界ランキング

Rk.	選手	国名	Dスコア	競技会
1	ZOU Jingyuan	CHN	7.0	WGC種18
2	VERNIAIEV Oleg	UKR	6.7	WGC種18
3	LIU Rongbing	CHN	6.6	NC中国17
3	YOU Hao	CHN	6.6	AC中国18
3	ARICAN Ferhat	TUR	6.6	WGC予18
6	LANKIN Dmitrii	RUS	6.5	Stuttgart17
6	山室 光史	コナミスポーツ	6.5	N杯17
6	XIAO Ruoteng	CHN	6.5	Cottbus18
6	NGUYEN Marcel	GER	6.5	E・C18
6	PAKHNIUK Petro	UKR	6.5	E・C18
6	神本 雄也	コナミ	6.5	N杯18

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	Dスコア	競技会
1	山室 光史	コナミスポーツ	6.5	N杯17
1	神本 雄也	コナミスポーツ	6.5	N杯18
2	野々村 笙吾	セントラル	6.4	N杯17
2	山本 翔一	朝日生命	6.4	AJ種17
2	千葉 健太	順天堂大学	6.4	AJ種17
2	垣谷 拓斗	セントラル	6.4	AJ種17

【鉄棒】

世界ランキング

Rk.	選手	国名	Dスコア	競技会
1	齊藤 優佑	徳洲会	7.0	AJ種17
2	内村 航平	リンガーハット	6.9	AJ種17
3	BRAEGGER Pablo	SUI	6.8	E・C17
4	宮地 秀享	日本	6.7	WGC個17
4	市瀬 達貴	朝日生命	6.7	AJ種17
4	ZONDERLAND Epke	NED	6.7	E・C18
7	ZHANG Chenglong	CHN	6.6	NC中国17
7	BRETSCHNEIDER Andreas	GER	6.6	Paris17

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	Dスコア	競技会
1	齊藤 優佑	徳洲会	7.0	AJ種17
2	内村 航平	リンガーハット	6.9	AJ種17
3	市瀬 達貴	朝日生命	6.7	AJ種17
3	宮地 秀享	茗溪クラブ	6.7	WGC個17
5	田中 佑典	コナミ	6.5	AJ団17
6	横井 君宇	日本体育大学	6.3	AJtry18
6	浅野 佑樹	早稲田大学大学院	6.3	AJ種17
6	横山 聖	コナミスポーツ	6.3	N杯18
6	小浜 廣仁	TEAM えひめ	6.3	N杯18

## 5. 2017年版採点規則修正、追加情報

### 1. 2017年版採点規則正誤表

日本語版 2017年版採点規則の誤植・追加等による訂正

ページ	訂正箇所	誤		正
p121	IV-36	後方かかえ込み3回宙返り下り	⇒	難度表記 <u>G</u> を追加
p161	I-95	前方開脚宙返り支持経過懸垂	⇒	前方宙返り開脚抜き支持経過懸垂
p161	I-100	前方開脚宙返り抜き腕支持	⇒	前方宙返り開脚抜き腕支持
p161	I-101	前方開脚宙返り抜き屈腕支持	⇒	前方宙返り開脚抜き屈腕支持
p167	II-53	後ろ振り上がり前方開脚宙返り腕支持	⇒	後ろ振り上がり前方宙返り開脚抜き腕支持
p177	タジェダ	技番号訂正 III-124	⇒	III- <u>125</u>

### 2. 2018年1月公表の FIG Code of Points 2018.1月版での変更箇所

※黄色塗りつぶしは、本号であらたに修正・追加された箇所

#### (1) 一般条項

該当箇所	変更種	内容												
P9 減点表	項目削除	演技中、コーチが選手に話しかける ※P11、コーチの行為にて対応												
P9 減点表	項目追加	公式ウォームアップ時間を守らない：決定点から毎回 0.30 減点（審判長によって）												
P10 減点表	項目追加	公式ウォームアップ時間を守らない：チーム得点から毎回 1.00 減点（審判長によって）												
P21 7-4条 5.d)	文言追加	各種目において、難度表に記載されていない開脚の力技または静止技を実施した場合。												
P28 9-2条 13.	文言追加	つり輪において、振動または引き上げから静止姿勢に移る間、肩は最終的な静止姿勢より上げてから持ち込んではならない。												
P28 9-2条 17.	表の移動	着地に関する減点表は 16.の後に移動する												
P28 9-2条 17.	項目追加 (文章変更)	着地に関して「小さくとぶ」とは、最大でも足ひとつ分の幅・距離を指す。それよりも大きな一歩はどんな場合も、「大きく1歩」として中欠点の減点となる。												
P28 9-2条 17.	番号変更	17.に項目を追加した事により、17.の文が 18.にずれる。												
P26 9-2条 7	文章追加	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>欠点</th> <th>角度</th> <th>減点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>わずかにまがる</td> <td>&gt; 0° - 45°</td> <td>0.1</td> </tr> <tr> <td>明らかにまがる</td> <td>&gt;45° - 90°</td> <td>0.3</td> </tr> <tr> <td>極端にまがる</td> <td>&gt;90°</td> <td>0.5</td> </tr> </tbody> </table> <p>唯一の例外:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平行棒-モイまたは車輪系の技のスイング動作中に水平位以前に、およびバブサー系の技の後に脚をまげること</li> <li>鉄棒-振動中の脚をまげること、および手放し技でバーをつかむ際の腕をまげること</li> </ul>	欠点	角度	減点	わずかにまがる	> 0° - 45°	0.1	明らかにまがる	>45° - 90°	0.3	極端にまがる	>90°	0.5
欠点	角度	減点												
わずかにまがる	> 0° - 45°	0.1												
明らかにまがる	>45° - 90°	0.3												
極端にまがる	>90°	0.5												

(2) ゆか

①ゆか条文

該当箇所	変更種	内容
P34 10-2条-1 c)	文章変更	(項目の文末に次の文を追加) 選手はフロアエリア全面を使用しなければならない。アクロバット技に際して同一対角線の使用回数には制限がない。しかし、各コーナーを使用しなければならない、不使用の場合演技につき一回、D審判による0.30のニュートラルディダクションとなる。 最終タンブリングで未使用のコーナーへ向かえば、このコーナーは使用したものとすることができる。
P35 10-2条-2 5.組合せについて (CV).	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 加点のために2つ(以上)の技を組合せる際、不安定な着地で大過失の減点があった場合、または直接とび正面支持臥になった場合は、組合せ加点は与えられない。
P37 10-3条 E審判の表	文言削除	減点表中の「転倒=1.00」の文言を削除
P37 10-3条 D審判の表	項目削除	終末技が跳躍技ではない、または認められていない技(転など)で終わる

②ゆか難度表

該当箇所	変更種	内容
I-44・45	文の追加	(難度表内に以下の文を追加) 「これらの技は倒立から行わないでも認定する事ができる」
II-48	技の追加	前方伸身宙返り 7/2 ひねり (ゴシマ) : G 難度
II-60	技の追加	前方かかえ込み 2 回宙返り 3/2 ひねり (ザパタ) : G 難度
III-7・8	文の追加	「後ろとびひねりからのものも含む」
技番号未定	技の追加	前転から手を広げた開脚浮腰支持経過十字倒立(リーク) : C 難度 (I)
III-23	技名追加	「ゴンザレス」

(3) あん馬

①あん馬条文

該当箇所	変更種	内容
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 a 5.)	項目追加	※新しい項目 「1回の旋回で正面横移動(馬端馬背から両把手を越えて逆馬端馬背)」で、D難度を得るためには、把手を使用してはならない。
	項目番号 変更	a 5) より項目番号がずれる a 6.) → a 7.) a 7.) → a 8.) a 8.) → a 9.) a 9.) → a 10.)
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 新 a 6.)	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 落下に関する規定をより明確にするため、全てのグループII・IIIの技は、倒立に上げて開脚での支持に下ろす技を除き、価値を得るためには難度表に掲載された技に続ける必要がある。落下した場合は部分的な価値も与えることはできない。次に続く技が開始された後に落下した場合は、前の技を認定することができる。

P62 1 1-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 旧 a 9.)	項目削除	以下、すべて削除。 トンフェイは開始/終了の体勢により、4つのタイプに分類される。その内3つのタイプは、終末局面で完全な旋回をもって技の完了とし、難度を認める。(横～縦、縦～横、縦～縦)								
P62 1 1-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 新 a 9.)	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 「ウ・グォニアンの上に、難度表に記載のいかなる技でも続けることができる(ロシアン180°や360°等)」								
P62 1 1-2条-2 2. 補足説明	番号変更	・モギルニー(Ⅲ-70)は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。 ・ベレンキ(Ⅲ-76)は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。								
P65 1 1-2条-2 3. 特別な繰り返し a)	番号変更 追加	・ドリッグス(E:Ⅲ-41) ・縦向き前移動(3/3:馬端～把手～把手～馬端)(C:Ⅲ-45) ・マジヤール(D:Ⅲ-46) ・開脚旋回縦向き3/3前移動(E:Ⅲ-53) ・ピロゼルチェフ(C:Ⅲ-51) ・縦向き後ろ移動(3/3:馬端～把手～把手～馬端)(C:Ⅲ-57) ・シバド(D:Ⅲ-58) ・開脚旋回縦向き3/3後ろ移動(E:Ⅲ-65) ・縦向きとび後ろ移動(馬端～馬端)(E:Ⅲ-59)								
P66 1 1-2条-2 3. 特別な繰り返し b)	番号変更	ロシアン転向技は、終末技を含めて演技中2回まで認めるものとする。ロシアン転向を含む一把手上で行うコンバインや、移動を伴うクロル、ウ・グォニアン、ロス、トンフェイ等に関してはこの規定を適用しない。(Ⅲ-87、88、89、81、82、94、95)								
P67 11-3条 E 審判	文章追加	<table border="1"> <thead> <tr> <th>振幅</th> <th>減点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>肩の高さより上</td> <td>0.0</td> </tr> <tr> <td>肩と水平位の間</td> <td>0.1</td> </tr> <tr> <td>水平位よりも下</td> <td>0.3</td> </tr> </tbody> </table>	振幅	減点	肩の高さより上	0.0	肩と水平位の間	0.1	水平位よりも下	0.3
振幅	減点									
肩の高さより上	0.0									
肩と水平位の間	0.1									
水平位よりも下	0.3									

## ②あん馬難度表

該当箇所	変更種	内容(移動先)
Ⅱ-27	技の追加	両把手を挟んで横向き(開脚)旋回ひねり(ケイハ2):C 難度
Ⅱ-30	技の追加	両把手を挟んで横向き(開脚)旋回1回ひねり(ケイハ):F 難度
Ⅱ-69	技名の追加	ベルトンチェリ
Ⅲ-47	技番号移動	Ⅲ-53
Ⅲ-59	技番号移動	Ⅲ-65
Ⅲ-59	技の追加	縦向きとび後ろ移動(馬端～馬端)(カルバノフ):E 難度
Ⅲ-63	技番号移動	Ⅲ-69
Ⅲ-64	技番号移動	Ⅲ-70
Ⅲ-70	技番号移動	Ⅲ-76
Ⅲ-75	技番号移動	Ⅲ-81
Ⅲ-76	技番号移動	Ⅲ-82
Ⅲ-81	技番号移動	Ⅲ-87
Ⅲ-82	技番号移動	Ⅲ-88

Ⅲ-83	技番号移動	Ⅲ-89
Ⅲ-88	技番号移動	Ⅲ-94
Ⅲ-89	技番号移動	Ⅲ-95
技番号未定	技の追加	両手を挟んでシュテクリ A (DSA) (ケイハ 3) : D 難度
技番号未定	技の追加	両手を挟んで外向き旋回ひねり (ケイハ 4) : E 難度 (Ⅲ)
Ⅱ-30	技の追加	両手を挟んで外向き旋回一回ひねり (2 回以内の旋回で) (ケイハ 5) F 難度 (Ⅱ)

(4) つり輪

①つり輪条文

該当箇所	変更種	内容
P91 1 2-2 条-2 2.	文章追加	グループⅡやⅢを連続して4回続けることはできず、D審判によって難度は認定されない。3連続の後にグループⅠのB難度以上の技が入れば改めて3連続が可能である(ただし、け上がり・後方け上がり系、およびその同一枠の技を除く)。このB難度以上の振動技はカウントされる10技内であつ同一グループ内で上位5技以内に含まれていなければならない。行われたグループⅡ・Ⅲの技は全て、カウントされる10技内であってもなくても、また技術欠点により不認定になったとしても、この項目に抵触するものとする。
P91 1 2-2 条-2 3. 特別な繰り返し c)	項目追加	基本的な支持姿勢である脚前挙支持と脚上挙支持は、違った力技だと考えられるため、この特別な繰り返しの項目には当てはまらないものとする。よって前振り上がり脚前挙支持と前振り上がり脚上挙支持を両方実施することができる。しかし「終末姿勢が同一の力静止技は各グループで1技だけ」とする制約により、例えばけ上がり脚前挙支持と前振り上がり脚前挙支持を実施することはできない。
P92 1 2-2 条-2 4. 補足説明 f)	文言削除	「停滞」を削除 ヤマワキやジョナサンで完全な支持や停滞がみられた場合
P92 1 2-2 条-2 4. 補足説明 g)	項目追加	「輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂」で持ち込む際に45°以上の角度の逸脱は難度を認定しない。また意図した技とは異なるため、部分的な難度も与えられない。 (以降、項目番号がずれる)
	項目番号 変更	g) より項目番号がずれる g) → 新h) h) → 新i) i) → 新j) j) → 新k) k) → 新l) l) → 新m) m) → 新n)
P92 1 2-2 条-2 4. 補足説明 新n)	文言追加	演技には1つの振動倒立技(2秒)が必要であり、カウントする10技に入っていないなければならない(ジュニア: 8技)。

②つり輪難度表

該当箇所	変更種	内容 (移動先)
II-23	技の追加	懸垂から伸腕で引き上げ脚上拳十字懸垂 (2秒) (コラック) E 難度
II-113	技の追加	ゆっくりと前方伸腕伸身支持回転十字懸垂経過中水平支持 (2秒) (ファミ 2) : E 難度
IV-42	技の追加	後方屈身 3 回宙返り下り (ウィッテンバーグ) : H 難度
IV-39	技番号移動	IV-45
IV-40	技番号移動	IV-46
IV-41	技番号移動	IV-47
IV-42	技番号移動	IV-48
IV-45	技番号移動	IV-51
IV-46	技番号移動	IV-52
IV-48	技番号移動	IV-54

(5) 跳馬

該当箇所	変更種	内容
跳越番号 110	価値点変更	3.6
跳越番号 111	価値点変更	4.0
跳越番号 230	価値点変更	3.6
跳越番号 342	価値点変更	3.6
跳越番号 574	技名追加	「シライ 3」
跳越番号 386	技名追加	「ヤン・ウェイ」

(6) 平行棒

①平行棒条文

該当箇所	変更種	内容
P151 1 4-2 条-1 6.	文言訂正	演技実施の減点に関しては、第 9 章および 9-4 条と 1 4-3 条における減点表を参照のこと。
P152 1 4-2 条-2 3. 補足説明 g)	項目追加	バブサーの実施について、バーを握る際は水平位で肩角度を開き、伸身で実施すべきである。バーを握る際に、身体が水平位から 45°以上の逸脱、または 90°の肩角度があった場合は、技の価値が与えられず、大欠点の減点となる。
P152 1 4-2 条-2 4. 特別な繰り返し a)	技名訂正 文章追加	前方 <del>5/4</del> 宙返り開脚抜き腕支持と屈腕支持、または支持経過懸垂や直接懸垂になる技 補足としてⅢ-47、58、59、65 は一括してこの規則に該当する。
P152 1 4-2 条-2 4. 特別な繰り返し c)	番号追加	最大 2 回までの棒下宙返り (逆上がり) 倒立技 (Ⅲ-106、107、108、114、119、120、123、124、130、131、136)
P152 1 4-2 条-2 5.	文言訂正	技として認められない原則や D スコアに関する他の詳細項目は第 7 章および 9 - 4 条、1 4 - 3 条の減点表を参照のこと。
P153 平行棒特有の減点	追加	「公式ウォームアップ時間を守らない」の項目は「D 審判」の項目表として独立して巻頭に配置。
P153 平行棒特有の減点	項目追加	(「E 審判」の減点が続く) ・モイ、後方車輪、水平位よりも早く脚がまがる : 小・中欠点 ・バブサー等、水平位でバーを握り懸垂になる技で、け上がりの際の膝がまがる : 中欠点

②平行棒難度表

該当箇所	変更種	内容 (移動先)
I-9	技の追加	前振り開脚抜き直接懸垂 (バボス) : C 難度
II-3	技の追加	前振り上がり開脚抜き懸垂 (ムンテアン) : C 難度
III-42	技の追加	懸垂前振り片腕支持 3/4 ひねり単棒倒立経過、軸手を換えて 3/4 ひねり支持 (バウマン) : F 難度
III-123	技の追加	棒下宙返り、かかえ込み姿勢でひねり腕支持 (ギャニオン) : C 難度
III-124	技の追加	棒下宙返り、伸身姿勢でひねり腕支持 (ギャニオン 2) : D 難度
III-121	技番号移動	III-127
III-122	技番号移動	III-128
III-128	技番号移動	III-134

(7) 鉄棒

①鉄棒条文

該当箇所	変更種	内容
P188 15-3条 鉄棒特有の減点	削除	「D 審判 (ニュートラルディダクション)」の表
P188 15-3条 鉄棒特有の減点	項目追加	エンドーやシュタルダーとワイラーの開始時の倒立位からの逸脱 : 小・中・大欠点 (難度は認定)

②鉄棒難度表

該当箇所	変更種	内容 (移動先)
III-86	技番号移動	順手背面懸垂前振り上がりひねり支持 (オノ) (I-74 ~)
II-46	〃	II-40
II-47	〃	II-5
II-52	〃	II-58
II-54	〃	II-60
II-57	〃	II-39
II-59	〃	II-71
II-60	〃	II-72
II-63	〃	II-45
II-66	〃	II-90
II-66	技の追加	ゲイロード 1 回ひねり (コーディノフ) : G 難度
II-69	技番号移動	II-51
II-72	〃	II-54
II-83	〃	II-89
II-89	〃	II-83
II-90	〃	II-96
II-96	〃	II-102
III-57	技の削除	シュタルダーとび大逆手持ち換え

## 6. おわりに

審判委員会  
体操競技男子審判本部  
本部長 高橋 孝徳

2018年は日本の男子体操界にとって大きな課題の残る年となりました。ドーハでの世界選手権では団体総合で中国、ロシアの後塵を拝し、個人総合は23年ぶりのメダルなし、種目別も含め金メダルを獲得できずに終わりました。アジア競技大会においては、団体戦で中国に12.80の大差をつけられる結果でした。2016年のオリンピックリオデジャネイロ大会の功績から急落し、強豪国の進展、新ルールにおける技の認定や評価の潮流に対応できていなかったことを否めません。

採点規則は2006年より現在のD・E形式の採点方式に改訂されました。当時の日本は長い間、Eスコアの高さで勝負をしていた一方、Dスコアの底上げが課題であり、常に演技の難易度を上げる事を求められていました。その結果、Dスコア向上への意識は高まりましたが、重要視されるのは技の認定の是非に関する判断基準が多くを占めていたように感じます。ひとつひとつの技の完成形を目指すとき、認定される素形態の捌きから減点のない実施へ、その先の魅了する技捌きの域に至る探求心と修練が存在するはずです。しかしながら、いつの間にか高難度技の導入やDスコアの高さに満足し、演技の質について目を向けることが疎かになっていることが拡散していたように感じます。我々日本人が根幹としていた「美しい体操」に対する意識と取り組みは気づかないほどに僅かずつ衰えてしまっていないでしょうか。

この状況を鑑み、強化本部は基礎・基本からの動きの構築の重要性を謳い、その対策に取り掛かりました。姿勢、表現、技術、体力強化等に関し、アクロなど様々な分野からアプローチし、垣根を越えて有益な技術情報を取得しようと取り組んでいます。また1月には中国・北京、2月には味の素NTCにて中国チームとの合同合宿を実施し、奮励しています。これらの取り組みの志向はナショナル選手だけが対象ではなく、全ての選手・指導者に同様の意識をもって取り組んでいただきたいと期するところです。

昨年より第32回オリンピック競技大会(2020/東京)の予選が始まり、日本男子体操はいち早く団体の出場権を得ることができました。これからの勝負は、日本が追い求めてきた美しい体操を取り戻し、停滞したこの位置からの巻き返しを図らなければなりません。東京2020大会まで1年余りと僅かな期間において、最大の目標を叶えるためには創意工夫に満ちた戦略とそれを可能にする甚大な努力、また関係するすべての総合力の結集が肝要です。選手・指導者の皆様は現行ルールを熟知するとともに本情報を精読し、2019年度の大会に臨んで頂きたいと存じます。

審判員は採点規則に精通するとともに本情報を熟読し研鑽を積んでください。審判業務を遂行するに当たっては規則を遵守することはもちろんのこと、体操競技の本質を今一度鑑み、一演技ごと注力して採点に取り組んでいただきたいと存じます。

2018年度より、U-15、U-12の新規則が適用されました。これによりルールの大枠を一本化しつつ、成長過程に合わせながら、段階的に競技力が進展していくことを期待しています。新ルール適用の初年度でありましたが採点に関しては、携わっていただいた審判員の方々のご尽力により、各競技会が大きな混乱や問題なく、滞りなく進行されましたことに感謝申し上げます。評価基準については、従前の採点から見方を切り替えていただき、一般規則の評価基準と同様に理想像を常に念頭におき、採点業務に当たっていただきますようお願いいたします。

本情報では、世界選手権報告、2018年度の総括(一般、ジュニア規則)、Dスコアランキングを掲載してあります。また、別刷りでは、競技会に必要な各種目の採点指針の詳細、競技会における同点への対処としてタイ・ブレイク等をまとめてあります。

関係される皆様が、本情報を参考に競技会にてスムーズな運営、採点が出来ますこと、選手の方々の競技力が更なる進化、成長を成し遂げることを祈念いたします。